第277回

# 上半期に輸入が大幅に減少した野菜

今年の上半期は、昨年に国産が品薄高だったから輸入は増えたが、今年は野菜の生育が良く、輸入が減る流れは不思議ではない。ただし、市場流通での相場を目安に輸入が増減する品目もあれば、品目によっては相場に関係なく、一定量が必ず輸入される場合もある。国産にとって一定の輸入がある加工業務需要は、最も〝横取り〟しやすいし、国産の端境期を補完している輸入野菜も、国産の促成・抑制栽培や品種改良で代替していくことが可能だ。いずれにしても、輸入野菜の動向を見ることで、なかなか全容がつかみにくい国内需要を的確に把握できるはずだ。

## キャベツ

### 昨年の7万tが今年は2万t足らず、輸入は市場の品薄対応でなく加工用に

【概況】

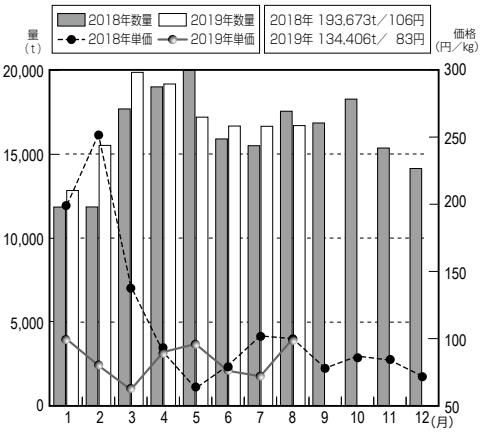
今年の上半期のキャベツの輸入量は1万9661tだった。昨年の同時期には7万t超えだったので72%もの減少だ。東京市場の昨年1~6月のキャベツ入荷量は、前年同期の4%減程度だったが、単価は2割高くて125円。とくに1~3月の入荷が少なく、単価は1月198円、2月252円、3月139円と高騰した。そのため、この時期に中国産の輸入が810tと急増したが、4月以降は市場入荷量が回復し、輸入は急減した。

【背景】

今年の1~6月を前年同期と比べると、入荷量は5%増だったものの、単価は34%安の83円。ほぼ同量だった一昨年でも108円だったことを考えると暴落しすぎだ。高騰の後に反発して急に安くなることがある。大部分は高値にあやかろうと入荷が急増するためだ。前年の1月が200円近い高値だったから、今年は1割程度増え、単価は100円を保ったものの、2月、3月と前年を大幅に上回る入荷増で、3月は62円と暴落したことが原因である。

【今後の対応】

市場相場と輸入との相関性はどうか。昨年1~6月期には7万tもの輸入があったが、今年は2万tにも満たない。同時期の東京市場の輸入品の入荷は昨年で810t、それが今年には17tである。東京市場は全国の1割程度が通常だが、輸入キャベツの場合、昨年で輸入量の1%程度。これからわかるのは、輸入は加工業務需要が中心で、市場の品薄高に対処しているのではなく、単なる高単価への便乗だ。事実、中国産はこの年、通常の2倍だった。




## 結球レタス

### 国産が不安定な冬春期でも輸入半減、ハウス栽培含め意図的な生産振興を

【概況】

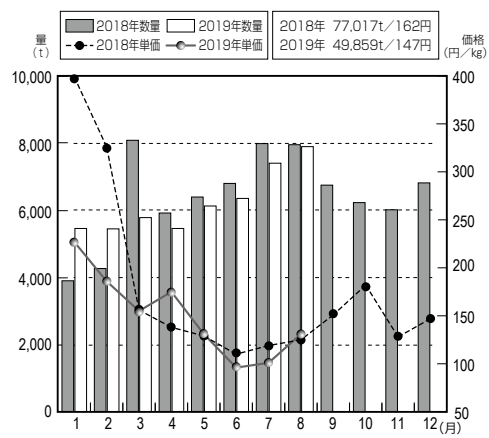
結球レタスの輸入は上半期で昨年のほぼ半数だった。何しろ昨年は前年比34%増で、史上最高を記録した。レタスはアメリカから夏場を中心に5000t程度輸入されていたが、この数年来、冬春期の国内生産が不安定なため、主に加工業務用として台湾からの開発輸入が始まった。実際に昨年の年明け、主産地の静岡産が大幅に生育遅れで1月にはキロ400円近くまで暴騰。遅れた分が3月に集中し、半値以上の暴落を招いたものの156円。

【背景】

そんな特殊事情がなかったため、今年上半期の輸入は半減した。東京市場への輸入品の入荷状況も、昨年にはさすがに台湾産が前年より6割増えて約400t。しかし、今年は約3割減ったものの、平年並みの入荷だった。昨年1月に大幅に入荷を減らした静岡産は、今年は平年並みで市場全体では4割増だが、まだ品薄感があって1月の単価は200円超え。その後は安定入荷が続いて価格も落ち着いた。加工業務需要者が安定して原料を確保している証拠だ。

【今後の対応】

今後も加工業務需要者は、とりわけ冬春期のレタス輸入を、日本種を使った開発輸入の形で固定化していくだろう。その一方で国内では、カット野菜企業のなかには契約農家や自社農園で、レタスをハウスで周年栽培する動きもあるが、露地栽培のレタスより管理が楽なブロッコリーに転換する冬春産地もある。いまや主要食材になったレタスは、軟弱性ゆえに緊急対応が難しい。意図的な国産振興がない限り、海外に〝当てになる〟産地を作るしかないか。



# 今年の市場相場を読む

流通ジャーナリスト
**小林 彰一**
青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。㈱農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オピニオン情報紙『新感性』、月刊『農林リサーチ』を発行。著書に『日本を襲う外国青果物』『レポート青果物の市場外流通』『野菜のおいしさランキング』などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。

## ブロッコリー

### 前年より46％減っても実数5000t、国内産地はリレー化意識し連携を

**【概況】**

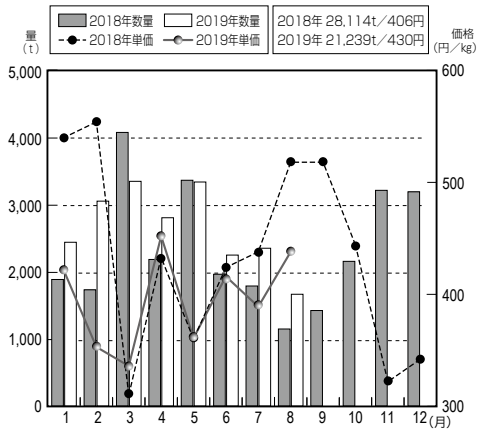
ブロッコリーは今年上半期に輸入量5000t弱、前年比で46％減った。かつて輸入量が半年で3万tを超えたことを考えると、この品目の国産化は目覚ましい。今年の輸入減少は、昨年に前年より3割程度増えた分、一昨年レベルに戻っただけ。一方、東京市場の入荷動向から見ると、昨年上半期は一昨年より1割減ったことで15％ほど高くなった程度。東京市場を見る限り輸入が大幅減という感じではない。

**【背景】**

注目は東京市場の昨年の年明けだ。1月には前年より24％少なく4割高、2月には41％減の7割高に。それが今年1月30％増、2月は76％も増えて平年並みとなった。この間、輸入品の入荷は昨年上半期で前年より1割程度増えただけだったものの、今年は4割も減った。昨年の品薄高は、主産地の愛知、埼玉が3割前後入荷を減らしたから。今年の入荷増は主産地の一つ埼玉からの出荷がさらに減った一方、愛知産と香川産が大幅に増やしたからだ。

**【今後の対応】**

かつて年間7万tを超える輸入があった時代は、輸入品がマーケット価格に影響を与えたが、いまや東京市場での輸入品の割合は2％くらいしかない。だから、輸入の増減は市場に出荷するためではなく、市場相場によって小売店への供給がひっ迫すると輸入に連動するといったイメージ。輸入品は国産を含めてドールが独自の商流物流を持っている。輸入量そのものはかなり減少しているが、課題は産地リレーをどれだけ意識して連携できるかだ。




## ニンジン

### 3割減り4万t切るも市場入荷不変、大型品目ながら輸入はフレキシブル

**【概況】**

ニンジンの今年前半の輸入量は3万8621t、前年同期31％減という数字である。この割合はそれほど大きくないが、ニンジンの輸入は近年、毎年10万tを超えている。このまま推移すれば年間8万tのペース。2万～3万tという数字は決して小さくない。東京市場の昨年上半期は、前年より6％減っているため、輸入品の入荷は前年より28％増えている。これが今年の同時期、輸入全体は3割減っても東京市場入荷の全体量は不変だ。

**【背景】**

変わったのは輸入品の市場入荷が半分に減り、単価が3割安くなったこと。つまり、入荷全体が変わらないのに、単価を下げる輸入品が減り、国産が増えても安くなったという現象だ。では、産地の動向で見たらどうなるか。17、18、19年の各上半期の東京市場のニンジン入荷を比べてみると、年明けからの主産地・千葉が確実に入荷している反面、埼玉、茨城の補完産地からの入荷量が2～3割の幅での増減があり、続く春の産地・徳島の始まりも不安定ぎみだ。

**【今後の対応】**

輸入が減ったのは、市場動向から見ると今年の単価が昨年より3割も安くなったためだろう。主産地千葉でさえ、昨年対今年では151円から112円で26％安だったが、入荷不安定ぎみの茨城、埼玉産は90円前後とより安くなった。相場が安いということは、潜在的に生産量は多かったはずで、中小の加工業務需要を中心に輸入品に依拠しなくてもよかった。大型品目の割には輸入がフレキシブルなのは、日頃から中国、台湾との密接な付き合いがあるためだ。

